

臨濟禪師が上堂して言った。この肉体に一無位真人がいて、常にお前たちの口を出たり入ったりしている。まだ見届けていないものは見る見る。その時ひとりの僧が進み出て問うた。その無位真人とはなんですか。師は、席を下りて、僧の胸倉を掴んで言った。言え、言え。その僧は躊躇した。師は僧を突き放して、無位真人もこれでは糞かきべらへまは乾いた糞の棒へではないかと言って、そのまま居間に帰った。

『無門関』第三十七則

趙州^{じょうしゅう}、因^{ちな}みに僧問う、如何なるか是れ祖師西来意^{せいらいい}。州

云く、庭前の柏樹子^{はくじゆし}。

僧曰く、「境^{きやう}をもつて人に示すことなかれ」

州曰く、「吾、境をもつて人に示さず」

僧曰く、「如何なるか是れ祖師西来意」

州曰く、「庭前の柏樹子」

『無門関』趙州狗子

『趙州和尚、因みに僧問う、「狗く子しにも還はた仏性有りや。州曰く、「無」。」』

趙州和尚に僧が問うた。「犬にも仏性がありますか。」
趙州が答えた。「無い。」

『趙州録』にある次の条が抜け落ちている。

『学云わく、「上かみは諸仏に至り下は蝟あ子りに至るまで、皆な
仏性あり。狗子に什麼なんとしてか無き。」
師云く、「伊かれに業ごつ識しき性しやうの在る有るが為なり。』

修行者「上は諸仏から下は蟻に至るまで、全て仏性があり
ます。犬になぜ無いのですか。」師「彼に業識ごうしき性しようがある
からだ。」